

# 東北文学紀行

都 築 久 義

## 津軽―太宰治

この夏、学生時代から一度訪ねてみたいと思っていた津軽へ出かけた。いうまでもなく津軽は太宰治が生まれ、育った所である。

新潮文庫の『津軽』一冊を旅行鞆に入れて、上野を発したのは八時頃の夜行列車、翌朝六時頃に青森駅に着いた。青森から奥羽本線で弘前まで約一時間。ひとまず宿で休憩し、タクシーで五所川原へ向かった。おりしもこの日は、「ねぶたまつり」の最終日。五所川原の街はねぶたの行列で交通規制があり、街へ入ってタクシーがなかなか進まなかったのには困った。

「ねぶたまつり」といえば、青森市のお祭りとはかり思

っていたが、毎年八月一日から一週間は、青森県内のいたる所で行われていることをここに来てはじめて知った。しかも、青森市では「ねぶた」、弘前市では「ねぶた」と呼ぶ。もともとは弘前市が発祥の地であったとの由。青森市は戦後になって始められたのだが、青森が県都であることもあって、いまではこちらの方が有名だ。

五所川原から津軽鉄道に乗った。太宰治にちなむテレビや雑誌のグラビアには必ず登場するあの色あせた赤と白のツートンカラー電車だ。乗降口のドアが手動式だったのがなつかしい。車両は二つ、お客は十数人でまばら。案内書によれば終点の津軽中里までは一時間、目的地の金木町は三十分と出ている。電車は駅舎のない小駅にもひとつひとつ止って、いかにも田舎電車らしく山に囲まれた平野をゆっくり走り走って行った。津軽富士と言われる岩木山が、窓外

に見えるはずだが、土地不案内なためにどれが岩木山なのかわからなかった。

弘前から金木町に直接向かわず、タクシーを五所川原で乗りすてたのは、実はこの津軽鉄道に乗ってみたかったからである。太宰治も例の「津軽」の旅では、「青森の港に着いたのは午後の三時、それから奥羽線で川部まで行き、川部で五能線に乗りかえて五時頃五所川原に着き、それからすぐ津軽鉄道で北上し、私の生れた土地の金木町に着いた時には、もう薄暗くなっていた。」と書いている。

ところで、金木町は「かなぎ」なのか、「かなぎ」なのか、以前から疑問に思っていたが、駅の看板に「KANAGI STATION」とあるのを見て、やっとながいあいだの疑問が解けた。駅を降りると、小さいながらも商店街があり、タクシーも並んでいたの、想像していたよりも町らしかった。ただ、夏休みになると、女子大生たちが多勢やってくるに聞いていたが、八月の初めだというのに女子大生らしきグループをあまり見かけなかったのは、いささか拍子抜けだった。帰りのタクシーの運転手の話でも、最近はずっかり女子大生たちは訪れなくなっただし、一昔まえのように、太宰のゆかりの地をタクシーで巡る客はほとんどいない、とのことである。もっとも、わたし自身も金木から弘前へはどこにも寄りすずに直行した。

斜陽館は駅前の通りを歩いて五分、最初の四つ角を右に折れるとすぐに、斜陽館と書かれた白い門柱が目に入る。ひときわ高い赤いレンガ塀の上に、入母屋造りの二階建の赤い屋根がそびえたつ。二階建といっても、屋根が高いので、三階建くらいの感じがする。玄關を入った所が喫茶室。テーブルが四つ五つあり、奥には教人腰かけられるカウンスターもある。壁面には太宰の写真や、著名な来訪者の色紙が貼ってあった。ここは昔は津島家の土間だったらしい。一階の畳の部屋は四つ。いずれも十五帖くらい。襖をはずせば六〇帖の大広間になる。二階は泊り客専用のため見られなかったが、二階には太宰治が使っていた部屋があるはずだ。

庭は池や灯籠のある日本式庭園。古木がうっ蒼と茂っていて落着いた雰囲気はあるものの、卒直にいつて津軽きつての素封家にしては家も庭も小さいと思った。ものの本によると、敷地六〇〇坪、建坪三〇〇坪というのは、わたしの地方ではざらにあり、その地方きつての素封家に入らない。せいぜい小地主だ。普通の農家でもこの半分くらいはある。ちなみに、わたしの家は地主でも小作でもなく、ありふれた自作農だったが、敷地三〇〇坪、家は平屋建ながら約百坪の建坪がある。逆にいえば、この程度の家屋敷があれば、地方で一、二位を争う財産家として権勢を誇るこ

とができたところに、東北地方の貧しさがうかがえよう。冷害や飢饉にいつも悩まされ、身売りや出かせぎを余儀なくされたかつての東北の貧しさ——、その貧しさをくいのにし、高利貸しで一代にして財を築いたのが津島家だった。そして、その象徴が成金趣味のけばけばしい高い赤い屋根の家であり、土地を収奪された農民の暴動を恐れた堅固な高いレンガ塀である。ひといちばい感受性が強く、多勢の兄弟のなかでただ一人の秀才であった太宰治が、こうした家の成りたちや成金趣味に心を痛め、傷ついたであろうことは想像にかたくない。

文学碑の建っている芦野公園までは、徒歩で十五、六分だと聞いたから、地獄絵を子ども頃に見たと「思ひ出」のなかで語っている雲祥寺の前を通過して、てくてくと歩いて出かけたが、とても十五、六分では着かなかった。わたしの足で三十分以上はかかったような気がする。なにしろ電車でも一区間あるほどだ。公園の入口、国道沿いにしゅうしやな民俗資料館が最近できて、ここには太宰治コーナーもある。太宰が着用した和服や愛用の机、硯箱などの遺品や手紙類が陳列してあった。金木の町長が東京で津軽鉄道の芦野公園駅の切符を求め、そんな駅はないと言われて憤然としたという逸事を「津軽」で書いている芦野公園駅は、林のなかにあつてうっかりすると見落してしまふ。

「踏切番の小屋くらしいの小さい駅」ではないが、駅員は一人か二人しか見かけなかった。

文学碑は駅からさらに数分、公園の奥、芦野湖のほとりに建っていた。台座は高さ一メートル、直径三メートルくらいの円型。側面は石垣状のモザイク。碑は疊一枚ほどの黒石の真中が格子状にくりぬかれており、上部に太宰治、下部に「撰ばれてあることの／慌慌と不安と／二つわれにあり」が横書きで彫ってある。その黒石板を囲むように、幅三〇センチほどのやはり石垣状のモザイク。ただし、天辺は金属製の炎の中を金色の不死鳥が舞っている。製作者は太宰と同郷の阿部合成氏。碑隠には、フランス語の原詩と「1965・5 薀」の文字が刻んである。いずれにしても文学碑としては、斬新といえは斬新だが、作者の製作意図は理解に苦しんだ。金色の不死鳥（フェニックス）はともかく、牢獄の格子は文学碑にはなじまないだろう。

芦野湖に最近つり橋がかかり、それを渡って対岸に向かい、再び公園の散策路を通過して芦野公園駅に行った。桜のシーズンにはボートも浮かぶらしいが、ボートは湖畔にあがったままだった。芦野公園から金木まで電車に乗り、金木から弘前城までタクシーで帰った。道すがら話し込んだ若い運転手の津軽弁には閉口した。津軽弁の特徴の一つは早口だと聞いたが、たしかに早口なことがいっそう理解し

にくくしているようだ。ふと、「東京八景」で、太宰が東京にはじめて住んだとき、田舎者と笑われはせぬかと躊躇しながら、乱暴な自嘲の口調で東京地図を買求めたと書いていたのを思い出した。気どりやの太宰の津軽弁はどんな口調だったのだろうか、とも思ったりして弘前城の前でタクシーを降りた。

観光案内書によれば、弘前城は津軽藩代々の居城で、慶長十六年（一六一一）に建っている。広さは、東西六一二メートル、南北九四七メートル、三重に堀がめぐらしてある。現在も天守閣のほか二の丸に、辰巳櫓、末申櫓、丑寅櫓、追手門、亀甲門などの城門がある。もっとも、いま残っている天守閣は三層三階で小さい。弘前城跡・弘前公園は春の桜まつり、秋のもみじまつり、冬の雪まつりでにぎわうという。あいにくわたしの訪れたのは夏だったから、桜も紅葉も雪も見ることができなかったが、お堀の蓮池のピンクの蓮の花がちらほら目に着いた。

弘前は太宰が高校時代の三年間を過ごした青春の街だ。「私は秀才といふぬきさしならぬ名譽のために、どうしても、中学四年から高等学校へはひって見せなければならなかった」（「思ひ出」）彼は、見事に期待にこたえて青森中学四年修了で、昭和二年四月、弘前高等学校へ入学、遠縁にあたる家で下宿生活を送った。そして高校生の分際で義

太夫を習い、花柳界にも出入りして青森の芸妓となじみになり、あげくの果てに落籍までする放蕩ぶりを示した。それでいながら、プロレタリア文学隆盛の風潮に迎合するかのようになり、「細胞文芸」を創刊して、「無間奈落」を発表したり、学外の『座標』には「地主一代」や「学生群」を寄稿して、地主階級を告発し学生のストライキを支持する小説を書いていた。が、ホッネのところでは中学時代から井伏鱒二に傾倒し、東大進学で上京して彼を訪ね、以後太宰が井伏に師事したことは、よく知られているとおりである。太宰が「ひとりで弘前城を訪れ、お城の広場の一隅に立って、岩木山を眺望した……」（「津軽」というあたりに）たらずんで、わたしは彼の放蕩と彷徨をきわめた弘前の青春に思いをめぐらした。岩木山は空がかすんでいてよく見えなかったが、太宰が過ごした時代から五十年後の発展した弘前の街が眼下に広がっていた。

### 洪民・盛岡―石川啄木

弘前で一泊して次の日の朝、弘南鉄道のバスで十和田湖へ向かう。定期観光バスのなかには、太宰の「津軽」の一節の朗読や津軽三味線をバックにした津軽じょんがら節が流れ、十和田湖輪山の山なみを走る二時間余は快適だった。

湖畔の東の拠点、子の口に風ちかくに着き、三十分毎に出ている観光船で十和田湖観光の中心地・休屋に渡る。遊覧船で十和田湖を訪れた詩人や歌人の歌をなんども聞く。高村光太郎の「湖畔の乙女像」はあまりにも有名だが、与謝野鉄幹・晶子夫妻までもがここに遊んだことは初めて知った。さすがに休屋は十和田湖観光客でにぎわっていた。湖畔の宿で一夜を過ごし、翌朝はやく、花輪線・十和田南駅へ。こんどは国鉄バスである。途中、発荷峠で小休止。十和田湖を見おろし、遠くに八甲田連峰を展望。亡くなったばかりの、新田次郎の「八甲田山死の彷徨」を思い浮かべる。一時間三十分ほどで十和田南駅に。花輪線は、奥羽本線・大館と東北本線・好摩を結び、十和田南から好摩までは急行で約二時間。この間に高山植物が咲き乱れていることで知られる高原地・八幡平がある。

好摩は東北本線では洩民の隣の駅。啄木の時代には洩民駅がなかったので、好摩から盛岡や東京や北海道へ旅立ったという。駅の待合室には啄木の写真や拓本が飾ってあり、駅前には啄木めぐりの案内板が建っている。近くには「霧ふかき好摩の原の／停車場の／朝の虫こそすずるなりけれ」の歌碑もあり、まさに啄木一色だ。駅前のタクシーに啄木ゆかりの地の案内を頼む。五十才を過ぎた初老の運転手に最初に案内されたのが、北上川畔の小高い丘。例の

やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

の歌碑が建っている。身の丈二倍もあるほどの、大きな自然石が長方形にくりぬかれ、そこに活字体で歌が刻んである。大正十一年四月、啄木十回忌に建てられたというだけに、風雪にたえた年輪が碑にしみこんでいる。背後の雄大な岩手山も眼下のゆったりとした北上川も、この碑の背景に似つかわしい。

歌碑のある丘から車で十分。小さい山の中腹に石川啄木記念館があり、旧洩民小学校や代用教員時代の止宿先も移転復元してある。洩民小学校は木造二階建一棟。一階は職員室や用務員室や集会場。二階が教室二つ。古びた黒板に壊れた机が十数個。窓が少なく天井が低いので貧しく暗い印象を与える。洩民小学校は彼の母校であり、啄木二十一才の一年間、代用教員を務めた学校でもある。「そのかみの神童の名の／かなしさよ／ふるさとに来て泣くはそのこと」と詠んだ啄木の顔が浮かぶ。

明治三十九年三月、新妻と老母を連れて盛岡から洩民村に帰った啄木一家が借りた農家はわらぶきの小さな二階家だ。「不取敢机を据えたのは六畳間。……この一室は、我

が書齋で、又三人の寢室、食堂、応接室、すべてを兼ねるのである」と、引起して来た三月四日の「洩民日記」に書いている。ついで、十年まえに開館した平屋建の記念館へ。例によって啄木の遺品、書簡、原稿、著書などが陳列してある。裏手に啄木が幼少期を過ごした宝徳寺。境内のひばの老木の下に「ふるさとの寺の畔の／ひばの木の／いただぎに来て啼きし閑古鳥／」の歌碑。

啄木が出生した常光寺は、記念館からさらに山奥へ八キロ入った田舎びた所にある。が、寺そのものは近代風に再建されて往時の面影はない。「啄木生誕の地常光寺」の白い標柱だけが、啄木との由縁を語っている。年譜によれば明治十九年二月二十日（異説あり）にこの地で生まれ、一年あまりで常光寺に移っているようだ。「かにかくに洩民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川」をあとに、そのままタクシーで盛岡へ行った。駅前のそば屋で名物のわんこそばを食べたが、二十ばいくらいでダウン。お世辞にもうまいとは思えず、口直しにほかのものをもう一度注文した。

盛岡は啄木の第二のふるさとである。明治二十八年三月洩民尋常小学校を首席で卒業した啄木は、四月、盛岡高等小学校へ入学し、三十一年盛岡中学校へ進学、三十五年十月同校を退学するまでの七年間と、三十八年六月から九カ

月ばかり新婚生活を盛岡で過ごしている。盛岡中学校で、金田一京助に出会い、野村胡堂を識って文学を語り、『明星』に投稿した短歌が載って文学を志し、盛岡女学校の堀合節子を見そめて激しい恋に燃えたのも、ここ盛岡であった。貧困と病苦にさいなまれ、波乱にみちた短い生涯のなかで、啄木の唯一の希望と誇りの時代はこの盛岡時代——とりわけ盛岡中学校の四年有余であろう。

啄木が六年間の恋を突らせ、堀合節子と新居を構え、たった二十日あまりだったが新婚生活をすごした家が、駅からあまり遠くない中央三丁目（旧・盛岡市惟子小路）にある。この家はもと足軽屋敷だったとかで、玄関を入った二間、八畳と四畳半を借りて啄木の両親と妹と新婚夫妻が同居した。四畳半が書齋。ただし、「この室に起居を同うする者三人あり。一人は我なり、二人は女なり、その内の一人は妹なり。従って三脚の机あり。……」（「我が四畳半」という具合であった。もっとも部屋のかなは、「一間半の古格子附いたる窓は、雨雲色に燻ふりたる紙障子四枚を立て、中の二枚に硝子嵌まり、日夕庭の青葉の影を宿して曇らず。西向なれば、明々と旭日に照らさるゝ事なくて、（略）窓の下の方一尺五寸に切りたる炬あり、一日に一度位は豆大の火種もなくなりて、煙草を吸ひつけるに燐寸を擦る事はあれど、大方は昼も夜も、五合入りの古鉄瓶に噌

々として断続調を成す松風の楽を聴く、……」と風雅の趣がただよっている。その趣はいまも残り、ランプと古鉄瓶が啄木の新婚時代をしのぼせる。それにしても、定職も収入のあてもなく、しかも両親や妹の面倒までみなければならぬ啄木が、たとえ激しい恋の末とはいえ、よくも結婚したものだと思心した。ちなみに啄木はまだ二十才だった。「先んじて恋のあまさと／かなしさを知りし我なり／先んじて老ゆ」には、まことに早熟多感な啄木像がほうふつとしてくる。

盛岡城跡には天守閣も城門もないが、石垣が高く入り組んでおり、老樹がおび繁っているのだからにも城跡の感じがある。盛岡城は別名、不来方城、南部藩の居城である。もともとこの地を不来方といったのを、「盛りあがり栄える岡」の祈願をこめて盛岡と改称されたことをガイドブックで知った。城跡は岩手公園になっており、啄木の歌碑のほか宮沢賢治と新渡部稻造の碑も建っている。啄木の歌碑は高さ一メートルくらいで小さい。自然石に色紙板の銅板がはめ込まれ、金田一京助の筆になる歌が刻んである。歌はいうまでもなく――

不来方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

昭和三十年十月、啄木生誕七十年を記念して盛岡啄木会が建てた。小じんまりとしていて城跡にふさわしい風格が感じられた。

### 花巻―賢治・光太郎

盛岡駅を発ったのが三時過ぎであったから、花巻駅に着いたときには四時をまわっていた。花巻は宮沢賢治のふるさとというよりも、盛岡中学と盛岡高等農林学校の学生時代を除いて花巻からほとんど外へ出なかつたので、ここは賢治の文学と思想の実践の地である。それだけに花巻には賢治のゆかりの場所は多いが、時間がなくて「雨ニモマケズ」の詩碑のみを訪ねた。『宮沢賢治の碑』と題する小冊子には、花巻市内だけでも七カ所出ている。是非、文化会館の賢治常設展と花巻農業高校に移転された羅須地人協会の建物は見ておきたかった。

「雨ニモ負ケズ」の詩碑は、花巻駅から南へ三キロ、花巻市桜町にある。桜町とはしゃれた名前だが、周囲は田畑や林だ。碑は林のなかの台地に建っている。高さ三・一四メートル、幅一・四一メートル。昭和十一年の建立らしく古めかしい。碑文は高村光太郎が書いた「雨ニモ負ケズ」の後半部。碑のまわりには竹垣があり、碑の前にはきれい

な花が供えてあった。

宮沢賢治がこの地——花巻郊外の下根子の宮沢家別荘で  
独居自炊の生活を始めたのは大正十五年四月からである。  
彼は四年余奉職した稗貫農学校の教師を辞め、附近を開墾  
して、自ら農耕に従事するかたわら、近郊の農民たちに化  
学、肥料、土壌といった科目を講義し、稲作の施肥や冷害  
の相談にあづかって東奔西走した。また、「もっと明るく  
生き生きと生活する道を見つけない」と「農民芸術概論綱  
要」を説き、「芸術をもって灰色の労働を燃やせ」と、苛  
酷な東北農民を勇気づけた。熱心な日蓮信者だった彼は、  
その宗教的発露としての理想郷を夢見たのである。だが、  
文字どおり、「東ニ病氣ノユドモアレバ行ッテ看病シテヤ  
リ／西ニツカレタ母アレバ行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ／……」  
の活躍が病を招いて療養を余儀なくされ、昭和三年八月兩  
親のもとに帰った。それから五年後の昭和八年九月二十一  
日、三十八才の生涯を閉じた。生前刊行された著書は詩集  
『春と修羅』第一集と童話集『注文の多い料理店』の二冊。  
おびただしい詩稿や童話はほとんど死後刊行され、その評  
価は詩人としても童話作家としても高い。生涯を地方にあ  
って農民とともに暮し、強い宗教的自制心で禁欲生活をお  
くった賢治の生きざまに、わたしは胸をうたれる思いにか  
られ、詩碑に手を合せ合掌してそこを去った。

花巻温泉で一泊したあくる日の朝、花巻温泉と花巻駅の  
中間にある、高村山荘と高村光太郎記念館に寄った。高村  
光太郎が東京の空襲で家を焼かれ、宮沢賢治の縁で花巻へ  
やってきたのは昭和二十年五月であった。当初宮沢宅や地  
元の医者、佐藤隆房宅に奇遇していたが、十一月、郊外の  
山里に移り、建設現場の飯場小屋だったという粗末な山荘  
で独居の生活を始めた。記念館発行のパンフレットで「高  
村光太郎は、この地において、素材の柱と梁、杉皮葺の屋  
根、障子一重の窓、荒壁、畳三畳半の山小屋で、光太郎の  
いう山居七年の孤独の生活をしておった。厳冬零下二〇度  
吹雪の夜は寝ている顔に雪がかかり、生きているものは自  
らと幾匹かの鼠とだけの夜を暮らし、鼠の害に会い毒物を  
おいて悔恨し、炎暑の夏には虻やぶよにさいなまれる自耕  
に身をゆだね、自洗自炊の歳しき毎日であった。」と、前  
述佐藤隆房は記している。山荘はあばら屋のままの形を残  
し、それをすっぽり、納屋風の鉄骨造りの建物が包んでい  
る。

建物のなかは回廊風になっていて、小屋の内部がガラス  
越しに見える。箆が二つ三つ、背負子や縄、ガラス瓶と土  
瓶が数個、麻袋や木箱などが乱雑に置いてあり、ランプが  
ぶらさがっている。光太郎の雪の山荘のわびしい生活がひ  
しひと伝わってくる。戦時中、各地に疎開した文学者た



ちも、終戦とともに東京に帰って行ったのに、光太郎はなぜこんな山奥に七年間もとどまったのか。「暗愚小伝」に詠んだように、戦時下の行動を自から指弾し、鞭うつためにかような山中で孤独と貧しさにたえたとしたら、あまりに自己にきびしくいたましいではないか。

山荘の近くには昭和四十一年に建った高村光太郎記念館がある。切妻屋根の民家風で、玄関が格子戸になっているのが印象的だった。手まえに石碑がある。横たわった自然石に原稿用紙に書いたままの「雪白く積り」を陽刻した銅板がはめである。館内には七年間の山荘生活を物語る愛用品、写真、色紙、原稿などが展示してある。智恵子遺作の切抜絵が目を引きいた。記念館の裏山の中腹には、智恵子展望台の標柱も建っている。光太郎はここに来ては智恵子を偲んだのであろうか。「智恵子は死んでよみがえり、／わたくしの肉に宿ってここに生き、／かくの如き山川草木にまみれてよろこぶ。」と詠み、「わたくしの心は賑ひ、／山林孤楼上と人のいふ／小さな山小屋の囲炉裏に居て／ここを地上のメトロポオルとひとり思ふ。」と「メトロポオル」で結んでいる。

この日の午後は花巻から一ノ関へ出て中尊寺へ行った。平泉の中尊寺といえば、義経伝説と「奥の細道」が思い起こされ、「夏草や兵どもが夢の跡」の句碑が中尊寺のどこ

かにあると思つて探したが見つからず、隣りの毛越寺に建っていたのはわたしにとって発見だった。千円で拓本を一枚買う。夕方、仙台に着く。次の日の午前中は松島、午後は青葉城跡へ出かける。ここに島崎藤村と土井晩翠の碑がある。藤村の碑は昭和十一年に八木山に建てられたのを戦後になって移したとかで、古めかしくて字もよく読めない。あまり知られていない「草枕」の詩の一節が彫っている。晩翠の方は「荒城の月」。昭和二十七年八月十一日に建てられたが、その直後に亡くなった。そばにブロンズの胸像もある。津軽に始まったわたしの東北文学旅行も、二日目の仙台の夜でピリオドを打った。翌日、盆の帰省客でいっぱいのお盆で小牧へ帰った。

(本学助教授)